

『荒涼館』とユーレイニア慈善
——二人の語り手をめぐって——

Bleak House and Urania Cottage:
On the Relationship between the Two Narrators

小西 千鶴

Chitsuru KONISHI

はじめに

大法官裁判所の諷刺から語り始められる『荒涼館』は、当時の司法システムを批判する社会的意図を持つ小説と見える。しかし、小説冒頭、揶揄の対象として大法官裁判所を名指すや否や街を覆う霧や泥の描写に語りの焦点が移ることが典型的に示すように、じつは諷刺の対象となる裁判所のシステムそれ自体は、具体的には描かれない。むしろ大法官裁判所は、国内に蔓延する様々な社会悪を表すひとつの比喩として小説に置かれているようだ。¹ しかも興味深いことに、この物語は、主に現在形を用いる三人称の語り手と、自身の生い立ちを過去形で綴る一人称の語り手「エスタ」とが交互に物語を語るという特殊な構成を持つ。そこで語られる内容も、三人称の語り手が、大法官裁判所を中心に準男爵のデドロック家から貧民街 Tom-all-Alone's に至る公的な領域の出来事を描写するのに対し、エスタの語りには、彼女の生い立ちや恋愛、家政の問題を中心に私的な領域の出来事を描く。この小説が大法官裁判所の旧弊なシステムの改善を目指すだけのものなら、こうした特殊な語り手をおく必要はないはずだ。単純な社会制度に対する諷刺から読者の注意を逸らす二人の異質な語り手を置いた意味は何だったのだろうか。小論では、二つの語り手の重要な接点となるデドロック夫人の過去の秘密を糸口に、『荒涼館』執筆当時にディケンズが手掛けたユーレイニア慈善とのつながりを探り、この特殊な語りを持つ小説の意義を考えたい。

1. デドロック夫人の過去

デドロック夫人の物語は、第二章の「上流社会」で、三人称の語り手によって導入される。その上流社会を「先例と慣習の世界である大法官裁判所とさほど変わらない」(5)と紹介する語り手は、一見したところ、第一章の大法官裁判所批判につながる旧弊な支配階級への攻撃を目指しているようにみえる。しかし、物語は、支配階級の現状ではなく、もっぱら美貌の貴婦人デドロック夫人の個人の履歴を語り、続く第三章で、語りは三人称の語り手からもう一人の語り手エスタへとバトンタッチする。そして、以後デドロック夫人の物語は、二人の語り手の連携を通して展開するのである。

しかも、三人称の語りにおいて示されるデドロック夫人の物語の焦点は、夫人の秘密そのものよりも、むしろ夫人の秘密を暴こうとするデドロック家の弁護士タルキングホーンとデドロック夫人との対決の形で展開する。ホードンとの恋の顛末を物語から排除し、代わりに彼女の秘密の追跡劇を三人称と一人称の二つの異なる視点から提示することによって、ディケンズがデドロック夫人の物語に込めたものは何か。

タルキングホーンは、デドロック夫人がわずかに見せた動揺の兆しを手掛かりに、その秘密を突き止め、彼女を執拗に追い詰めていく。しかし、彼の意図に関して、

Yet it may be that my Lady fears this Mr Tulkinghorn, and that he knows it. It may be that he pursues her doggedly and steadily, with no touch of compunction, remorse, or pity. It may be that her beauty, and all the state and brilliancy surrounding her, only give him the greater zest for what he is set upon, and make him the more inflexible in it. Whether he be cold and cruel, whether immovable in what he has made his duty, whether absorbed in love of power, whether determined to have nothing hidden from him in ground where he has burrowed among secrets all his life whether he in his heart despises the splendour of which he is a distant beam, whether he is always treasuring up slights and offences in the affability of his gorgeous clients — whether he be any of this, or all of this. . . (459; underlines mine)

という描写が示すように、様々な推測が列挙されてはいるが、そのいずれもが“may be”あるいは“whether”という言葉が頻繁に繰り返され、説得的な理由付けのない不条理なものとされる。しかも最終的に、私生児を生んだという彼女の過去の秘密を突き止めたタルキングホーンは、不思議なことに、その秘密を隠蔽

し続けることを彼女に強要する。タルキングホーンは「古風な老紳士」(23)と形容される旧弊な考えの持ち主で、「この世に女はたくさんいる。多すぎるくらいにいる。世の間違いの根底にはすべて女が潜んでいる」(259-60)と吐露するほど、あらゆる女性を法の秩序を乱す不穏な存在と見て、それを法の体現者としての自身の男性的な権力によって支配することを目指す家父長的な人物でもある。²

とはいえ、夫人とタルキングホーンの対立は、皮肉にも伝統を固守しようとしたタルキングホーンが殺害されることで唐突に決着を見る。一見、二人の対決は夫人の勝利に終わったかのように見えるが、以後この問題は、タルキングホーン殺害の犯人探し、さらにはデドロック夫人の失踪事件といった探偵小説的な興味をも伴いながら、デドロック夫人の私生児であるエスタの個人的な問題として、彼女の語りを引き継がれ、エスタと三人称の語り手という二つの異なる視点から立体的な光を当てて提示される。

もっとも、ここで重要なのは、家出をした母デドロック夫人を救おうとバケット警部と共に母の足取りを追うエスタの追跡劇が、もっぱらエスタの視点から語られ、タルキングホーン殺害の謎解きの論理より、デドロック夫人の安否を気遣うエスタの心情に物語の焦点が当てられていることだ。バケットと共にエスタが訪れるのは、娼婦がさまよう荒れた界隈で、死神に喩えられるテムズ川には、当時『タイムズ』紙 (*The Times*) が入水自殺をした女性たちの名前を掲載したコラム欄と同じ「水死体発見」(869)の掲示がある (Paxman 131)。このことは、社会から「墮ちた女」の烙印を押された女性たちの行く末がテムズ河での自殺であったこと、そして身分違いの恋愛の果てに貞操をやぶったデドロック夫人の過去の過ちもまた、売春の行為に通じることを示唆する。したがって、「罪の子」として虐げられて育ったエスタが自身の不幸の源である母親を救おうと夜の町を奔走するこの場面は、じつは「墮ちた女」に与えられた過酷な運命と社会制裁の不当性を伝えるためにこそ設定されていると言える。つまり、エスタの私的、心情的な語りは、「墮ちた女」を罪人として徹底的に糾弾するタルキングホーンに代表されるような、当時の父権社会の抑圧的なあり方に対する抗議と考えられるのである。

たとえば『オリバー・トゥイスト』における売春婦で盗人の情婦のナンシーの描写が明らかにするように、ディケンズは「墮ちた女性」を不合理な社会の犠牲者として擁護する姿勢を示してきた (332-33)。『デイヴィッド・コパフィールド』においても、漁師の娘エムリがエリート階級のステイアフォースに唆されて駆け落ちにはしる典型的な身分違いの恋愛において、最終的にエムリを叔父ペゴティの元へ戻し、むしろ誘惑した男性側の責任を告発している。

三人称の語りがその象徴的で皮肉な語り口を通して、大法官裁判所を中心とす

る旧弊な社会制度を批判する点で作家に通じる視点を持つことは確かだが、あらゆる感情を排して、淡々と事実だけを述べるその語り口は、批判の対象となっている社会の非人間的なシステムそのものに通じている。したがってそうした社会の冷酷なシステムを批判的な目で見つめるエスタの心情的な語りがむしろ作家のそれと重なって見えてくることを否定できない。

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。「墮ちた女性」を糾弾する社会の不条理を、冷徹な三人称の語りとタルキングホーンが代表する法的支配体制によって示し、それとは対照的に、彼女たちを擁護するような自身の見解を一人称の語りを通して作家が表そうとしたとして、なぜわざわざその語り手をエスタという女性、すなわち自分とは異なるジェンダーの持ち主と設定したのだろうか。その謎を解く一つの鍵として、当時ディケンズがその運営管理に携わっていた売春婦の更生施設ユーレイニア・コテッジ設立について考えてみたい。ハートリー (Jenny Hartley) が『『荒涼館』は、ユーレイニア慈善の最盛期に書かれた作品である』(50) と言うように、当時作家が深く関わっていたユーレイニア慈善を射程に入れることで、デドロック夫人の秘密をめぐるこの物語に新たな光を当てることができるのではないか。

2. ユーレイニア慈善におけるディケンズとバーデット=クーツ

ユーレイニア・コテッジは、資産家であり慈善家としても知られたバーデット=クーツ (Angela Burdett-Coutts) とディケンズによって 1847 年 11 月シェパード・ブッシュ (Shepherd's Bush) に開設された売春婦たちの更生施設である。

ディケンズとバーデット=クーツは、国が 1834 年に施行した新救貧法に共に強い反発を示し、貧困層を助けるための法とはじつは名目にすぎないという意見の一致を見ていたが、³ 二人はユーレイニアの慈善を形にするうえで根本的な相違を顕わにしてゆく。すなわち、ディケンズが、当事者の利益につながる慈善が必要と考え、刑罰改革者だったマコノキー (Alexander Maconochie) の「マークシステム」(The Mark System) を取り入れることで、売春婦の職業訓練の重要性を主張したのに対し (Letters 4: 554)、もともと彼女たちの精神的な救済を目的にするバーデット=クーツは、「信仰」という観念的なものを活動の中心に据えたのである。⁴

家庭教師メレディス (Hannah Meredith) から大きな影響を受け、以後 40 年間熱心な福音主義であったバーデット=クーツにとって、ユーレイニアに入居する売春婦たちの更生方法の核は、「モラル教育」を施すことであった。そのことは、宗教的な指示 (religious instruction) を忠実に遂行する聖職者の採用をめぐるディ

ケンズとバーデット=クーツとのやりとりからも明らかのように (*Letters* 5: 181), バーデット=クーツは、神への絶対的な信仰を誓うことによってこそ救済を求めべきだと考えていた。⁵

このバーデット=クーツの姿勢は、『荒涼館』におけるエスタの伯母バーバリーに通じるだろう。バーバリーは、日曜日には教会へ三度も足を運び、水曜日と金曜日の朝のお祈りにも通い、宗教講義にも出かけるほど指導者の教えに取りつかれた女性で、私生児であるエスタを常に罪の子と見て、彼女に母親の犯した罪の償いを迫る。そこに、ディケンズのバーデット=クーツ、あるいはその背後にいるメレディスに対する密かな批判を読み取ることはできないだろうか。じっさい、売春婦達の更生の主眼として誘惑の拒絶に拘るバーデット=クーツに、ディケンズは、「誘惑」は男性側にもその責任があるとして、社会に潜む矛盾を指摘している (*Letters* 4: 588)。また、入居者が現世において再び幸福を掴む可能性を否定するバーデット=クーツに、「かつては抱いていた夢を取り戻せるといった、いわゆる叶えられる希望なくして、自らの過ちを悔いてこの理不尽で無情な世の中に耐えうる改心を生じさせることは不可能だ」 (*Letters* 4: 588) と反論している。ここから浮かび上がるバーデット=クーツの姿勢は、エスタに一方的に悔い改めを迫り、将来の希望を奪い取ろうとしたバーバリーに通じるものだ。

売春婦の更生に関するバーデット=クーツの姿勢は、福音主義的な教義に限定されるものではなく、ヴィクトリア朝の父権社会に浸透する支配的な概念でもあった。もちろん、売春婦の更生施設の設定を企図したバーデット=クーツは、彼女たちの更生の可能性を否定している訳ではない。しかし、売春婦に対して彼女が語ったという「悔悟の証し及び誘惑に抵抗できるかどうか自ら試してみよ」 (*Letters* 4: 588) という言葉からは、ディケンズとは異なり、男性の誘惑よりも女性の側の責任を追及し、罪の悔い改めを求める姿勢が見られるのも確かである。その点で、バーデット=クーツの売春婦に対する姿勢には、エスタに罪の償いを押し付けたバーバリーのみならず、ヴィクトリア朝の体面を汚したデドロック夫人を「罪の女」と見て、自身が体现する法秩序の支配下に置こうとしたタルキングホーンにもつながる。デドロック夫人の秘密をめぐる夫人とタルキングホーンとの対決、そして、そのタルキングホーン殺害の罪を着せられた夫人がついには生きる望みを奪われて追い詰められてゆく様子を淡々と描きだしてゆく三人称の語りの世界は、慈善家バーデット=クーツの中にさえ密かに浸透している当時の支配的なイデオロギーを映し出すとともに、ユーレイニア・ホームの退所後、再び現実世界を生きなければならない売春婦を待ち受ける厳しい現実をも示唆していたと言える。

こうした冷酷な現実を描く一方で、ディケンズはデドロック夫人の物語を三人

称の語りの中には閉じ込めず、その同じ事象を、彼女の不義の証である私生児エスタの語りを通して、異なる角度から提示した。養母であるバーバリーに、誕生日が来る度に「お前の母親は恥だ、お前はその娘だ」(30)と言われて育ったエスタは、この声に悩まされ、「私は生まれながらに背負った罪を一所懸命努力して償いたい(私は明らかにその罪を認めながらも自分の責任ではないと感じていました)」(31)と、絶えず自分自身に関して半信半疑の状態に置かれていた。そして、その彼女の姿勢が、批評家の間でも議論となるあまりに慎み深い、じれったいような語り口調に反映されてもいるのである。⁶ ハートリーは、エスタの「罪の意識」に着目し、彼女の口調を、秘密の流出を恐れる不安の声とみる(163)。シヨア(Hilary M. Schor)は、エスタの語り口は当時の一般的な女性たちの口調を反映させたものだとし、女性の置かれていた社会的立場を軸に考察している(101-05)。一方でサロット(Eleanor Salotto)は、作家がエスタの女性らしさを誇張することにより、表向きは理想的な女性像を真似ながらじつはそれを覆す主張を込めた「見せかけ」であると論じている(333)。このようにエスタの語りの意義をめぐる解釈が分かれるのはその特異性を示していることに他ならないが、作家はそのエスタを通して何を伝えようとしたのか。

物語は、エスタが自身の出生の秘密にたどり着き、それと同時に、伯母によって背負わされた母親の罪を克服して、「私は自分の出生について何ら責任はない」(587)と自己の潔白を確信するに至る過程を示す。このエスタのあり方は、おどましい過去を乗り越えるべきユーレイニアの女性たちの境遇にも一致する。ディケンズがバーデット=クーツに宛てた手紙には、彼女たちの過去が「恐ろしい」、あるいは「極めてひどい」(Letters 5: 235)と形容されている。そのような恐ろしい過去を克服する手段として、ディケンズは、先ずホーム内で彼女たちの過去を封印し、それに触れることを一切禁じたという(Letters 5: 182)。これは、売春婦たちに自らの非を悟らせるためには過去と向き合うことが正道と信じるバーデット=クーツの考えに反するものだ。物語のなかで、デドロック夫人のスキャンダルを突き止めようと躍起になるタルキングホーンや弁護士候補生のガッピーの無責任な行動に対して、エスタが常に母の気持ちに寄り添い「過去に起こったことが何を変えるというのでしょうか」(579)と言うのは、したがって、ユーレイニアの女性に対するディケンズ自身の立場を反映したものと読むことができる。

ディケンズ自身、じつは、幼い時に父親が破産して債務者監獄に入れられ、靴墨工場に働きに出された過去をひた隠しにしてきた経験を持つ。したがって、売春婦に対する彼の姿勢には、彼女たちと同じく克服すべき過去を持つ彼自身の思いが投影されていると言える。しかも同時に、罪の意識を植え付けられて育ったエスタが、過去から解放される過程を語った『荒涼館』の物語は、同じく克服し

なければならない過去を持っていたディケンズが、自身の体験をエスタに投影したものとも言えるだろう。自身の辛い思いを売春婦たちのなかに見出し、それを当事者である弱い立場の女性の視点から語る。そのことこそ、隠すべき過去を抱えていたディケンズにとって、意味のあることだったのではないか。

ディケンズとエスタとの視点の重なりは、この物語に頻繁に書き込まれる「慈善」に対する姿勢からも読み取ることができる。たとえば、成長したエスタが最初に立ち寄る慈善家ジェリビー夫人の家。自身の家族を犠牲にして、遠い世界であるアフリカの人々の救済に夢中になるジェリビー夫人の慈善を、作家は、「望遠鏡的博愛 (Telescopic Philanthropy)」と呼んで皮肉っている。母親のための口述筆記で疲れ果てた長女のキャディは、慈善のために「家じゅうが恥さらしよ」(62) とエスタに訴え、ジェリビー夫人が「人類の兄弟愛」について懸命に語る間に子どもたちはエスタの話す民話『長靴をはいた猫』の方に夢中になる(58)。ここに、ユーレイニアの更生方法の核を信仰に置こうとするバーデット＝クーツへの皮肉を見ることも可能だ。さらに興味深いのは、ジェリビー夫人の慈善が、家政の否定につながっていることだ。

夫人とアフリカのコーヒー栽培や人類の同胞愛について毎日のように話し込むクウェル氏をはじめ、キャディの結婚式に出席した慈善家たちの主張に耳を傾けていたエスタは、「この人たちにとっては家庭的な使命などという卑しい使命は、それこそもっとも我慢のできない使命なのでした」(482) と、彼らに対して皮肉交じりの感想を漏らす。母親に反発するキャディは結婚前にエスタから「家政」について学ぼうとするが、この「家政」の手腕こそがエスタのアイデンティティを支えている重要な要素とされることを考えると、そこにもまたエスタとユーレイニア慈善におけるディケンズの主張とのつながりを見出すことが可能となる。というのも、ディケンズが考案した更生方法の核を成していたのが、じつは「家政」の訓練、つまり彼女たちが家庭に入ることを考慮して組まれた彼女たちの日課だったからである。

ユーレイニアにおいて、ディケンズは、彼女たちに朝6時の起床から夜10時の就寝まで、細かく正確に刻まれたタイムテーブルを用意した (Letters 4: 554)。ハートリーは、時間管理におけるディケンズの綿密さを「30分刻みで把握していた」(57) と伝えている。あくまでも実用性を考えた日課は、礼拝が朝と夜の2回、読み書き算術といった学習には午前中に2時間が費やされ、午後からは、針仕事や運動などの訓練が組まれた (Janes 35-46)。これは、マコノキーの「更生は厳しい訓練を通してのみ成し遂げられる」(192) とする考えに準じたものとも言える。パンも入居者たちが焼き、掃除、清潔を心がけるなど、将来彼女たちが家庭に入ることを考慮して日課が組まれているが、秩序と時間厳守が強調されているこの

ホームの日課は、エスタが送られた学校グリーンリーフでの日課を描く「グリーンリーフほど正確で規則正しいところはありませんでした。四六時中、万事が時間通りに規定の時刻に行われていました」(39)という描写とぴったり一致する。不義の子としてバーバリーから母親の罪のつぐないを押し付けられて育ったエスタが、伯母の死後グリーンリーフでの新たな教育を通して「家政」の能力を身に付け、最終的に母親の罪から解放されて幸せな家庭を築く物語の展開には、ユーレイニアの女性たちの現世での「やり直し」、すなわち結婚して家庭に入ることは論外と考えるバーデット=クーツとの意見の食い違いを見るなかで、自己の運営方針の正当性を信じるディケンズの密かな主張が込められていたと言える。

3. ディケンズの誤算

このように、『荒涼館』には、ユーレイニア慈善におけるディケンズの主張が様々な形で浸透している。しかし、ユーレイニア慈善におけるディケンズとバーデット=クーツとの意見の食い違いが、デドロック夫人の過去の秘密とその娘エスタをめぐる二人の異なる語り手による、二つの異なる立場の葛藤によって表されているにしても、ディケンズが何故わざわざ自分の立場や視点をエスタという自分とは異なるジェンダーの女性に託して語ったかという問題は、さらなる説明を必要とする。そこで注意したいのが、このユーレイニア慈善において発案者ですべての必要な資本を提供したのが女性であるバーデット=クーツであって、男性の権威主義的な社会と称されるヴィクトリア朝社会にあって、ディケンズが資本を提供するバーデット=クーツという女性の、自分とは異なる意見に耳を傾けなければならなかったという事実である。

急進派の政治家であったバーデット準男爵 (Sir Francis Burdett) の娘バーデット=クーツは、長子相続制が当然の社会にあって、若干 23 歳にして祖母のオールバンズ公爵夫人 (Duchess of St Albans) から大きな財を譲り受けた、当時としては極めてめずらしい存在で、相続後は、クーツ銀行経営者のひとりとして共同経営者たちとともに、いわゆる男性の世界で、その手腕を果敢に発揮していったという (Osborne 405A 177-78)。つまり、女性でありながら、男性的な役割を身に纏った女性でもあったのだ。この彼女と、幼い時に貧困生活を体験し、作家として成功してからも、ロンドンの路地裏をつぶさに歩くことで貧困の把握に努めてきたディケンズの間には、施設の運営をめぐる、時として意見の食い違いが生じた。しかし、たとえばディケンズが主張するマークシステムに終始難色を見せたバーデット=クーツに、ディケンズは、1847 年 10 月の書簡で一旦自己の主張を引き下げた (*Letters* 5: 178)。また、1853 年に『ハウスホールド・ワーズ』に掲載した

ユーレイニア・ホームの記事をめぐってのバーデット=クーツとのやりとり (Letters 7: 56) が示すように、ディケンズは資金提供者であるバーデット=クーツの同意なしに事業を進めることはかなわなかった。結局、再三の意見交換の末、両者は合意に至るが、この間にディケンズが経験したバーデット=クーツとの間のジェンダーの転倒の意識が、二人の語り手を設定した上で、男性である自己をエスタという女性の語り手に投影するというこの小説の構成に影響したのではないか。

もっとも、このように述べると、ユーレイニア慈善において、ディケンズは徹底して売春婦たちを擁護する側、そしてバーデット=クーツは彼女たちの過去を糾弾する当時の支配階級の側に立っていたように見えるかもしれない。しかし、たとえばマコノキーやブルース・カッスル・スクール (Bruce Castle School)⁷ など、画期的なシステムを利用しようとしたディケンズの売春婦たちに対する更生方法が、当時のジェンダーの規範を超えたラディカルな姿勢のように見えながら、その分刻みの厳しい時間配分と秩序の遵守によってやはり男性である自己の基準に則した支配階級的、あるいは非現実的な側面を持っていたことも否めない。ディケンズは『ハウスホールド・ワーズ』に1853年4月23日に“Home for Homeless Women”と題したホームの宣伝を兼ねた記事を掲載しながらも、じつは同時点で、最初に入居していた56名中7名が自ら退所を希望し、別の7名は逃亡、そして10名が強制退去という失態も抱えていたのである (Hartley 172)。腐敗した外の公的な領域で熾烈な生存競争を繰り広げる男性を、女性の守る家庭が浄化するといった有機的な循環の仕組み、その明確にジェンダー化された世界にあって“Public Women”とも呼ばれ女でありながら本来あるべき境界線を越えてしまった売春婦の救済を、現実社会への復帰ではなくむしろ信仰を通しての精神的な慰めに見出そうとしたバーデット=クーツの方が、その点では現実的でもあり、自らに課せられた「罪」の荷と向き合い、「勤勉」や「従順」そして「親切」を身につけるべく、ひたすら義務の道を歩むエスタのあり方により近いと言えるかもしれない。

じっさい、『荒涼館』においても、デドロック夫人の過去の罪は娘エスタ、さらには夫であるデドロック準男爵などの私的な領域においては完全な許しを得られるものの、彼女は社会という公的領域の中では、転落の人生に相応しい煉瓦職人の衣服を身にまとった姿で貧民墓地の前で息絶える。つまり、ディケンズは、一方では「墮ちた女」の救済と社会復帰を理想として謳いながら、その作品の中でさえ、実際に「墮ちた女」となったデドロック夫人に現実世界における救済を示すことはしないという矛盾を示していたことになる。

こう考えると、ディケンズも、じつは自分の理想が現実社会では実現できない

ということを密かに意識していたとも言えそうだ。じっさい、母親の罪を背負わされたエスタが、家政の手腕を得ることでその罪の意識から解放され、主婦となって幸福を掴むというこの物語において、彼女もまた浮浪児のジョーから移された天然痘の病によって生命の危険に曝されるし、母親譲りの美貌も失って、一時はアランへの恋心を諦めかけもする。そして、物語の終わりに、家政を立派に成し遂げてヨークシャーの荒涼館の女主人となったエスタが夫のアランから綺麗になったと称賛されるものの「一ひよとして (even supposing) 一」(989) という未だ自信の持てない少し曖昧な表現で物語を締めくくるのもまた、売春婦の更生問題に対して作家が無意識の内に抱き続けた価値観の揺らぎを表している。

おわりに

ユーレイニア慈善の開始から5年の月日を経て創作されたこの作品は、司法批判の「社会小説」と見せながら、じつは、当時ディケンズの心を占めていた「墮ちた女性」の問題を取り上げた作品と言える。それを二人の語り手から異なる視点で語らせたということ、そして何よりもディケンズがエスタという女性の視点を自分の考えを代弁する形で組み入れたことに大きな意味がある。たとえその発端が当時ディケンズが深く関わっていた慈善事業という作家の個人的な理由にあったにしろ、ウェストミンスターレビュー (*Westminster Review*) に掲載されたテイラー (Harriot Taylor Mill) による女性の社会進出を訴えた記事 “Enfranchisement of Women” (1851年7月) や、同年に設立されたシェフィールド女性政治協会 (Sheffield Female Political Association) など、50年代という女性が台頭しつつあった時代に社会の秩序を踏み越えた女性の問題を扱うにあたって、男性作家の視点を託されたエスタという女性の特殊な声は、作家の実人生におけるさまざまな屈折が込められた重層的なものであったからこそ、1853年のブラッドベリー版 (Bradbury & Evans) 『荒涼館』の序文で「これまでにない読者数を獲得した」(x) と作家が述べているように、当時の読者の大きな反響を呼んだのではないだろうか。

註

- * 小論は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会での口頭発表「『荒涼館』とユーレイニア慈善——二人の語り手をめぐって」(2015年6月13日於関西外国語大学)を補正、加筆したものである。
1. たとえば、Angus Wilsonは、大法官裁判所を英国政府への風刺と論じ、貧困などの深刻な社会問題を先送りにする政府を諭えたとみる(231)。

2. Davidoff and Hall は、「父家長制とは男性の年長者が常に優位に立つ慣習」と定義している (322).
3. バーデット=クーツの父バーデットは急進派の政治家で新救貧法に激しく異を唱え、娘バーデット=クーツも生涯にわたって救貧院に収容されていない貧民に与えた「院外扶助」の廃止に反発を示した。この親子はディケンズが『オリバー・トゥイスト』を通してこの法への批判を展開していることに興味を抱きこの作家との交流を始めた (Osborne 406B 138).
4. ディケンズは、バーデット=クーツへの書簡で、この慈善を「売春婦たちを救済するための偉大な仕事」と呼び、その実現を助ける自分の役割を「神聖な任務」(Letters 5: 183) と語って、バーデット=クーツの宗教的な意図を強調している。
5. バーデット=クーツの秘書を長年に亘って務めた Charles Churchill Osborne は、バーデット=クーツについて「その生涯を通してゴスペルの主唱者 (an exponent of the gospel) であり、その重要性を人に伝えることに努めた」と述べている (405A 146).
6. エスタの口調は、いわゆる公的な領域で活躍するタルキングホーンや伝道師チャドバンドに代表される雄弁な口調と対極にあって、口巧者の言葉に潜む虚偽に警鐘を鳴らしているかのようである。
7. ブルース・カッスルは、ユニテリアンの学校で、実用性を中心とする多様な科目を学ばせた。ディケンズは、この学校の教育体制を 1845 年 8 月 17 日, William Charles Macready に送った手紙の中で称賛している (Letters 4: 356-57).

引用文献

- Dickens, Charles. Preface. *Bleak House*. By Dickens. London: Bradbury, 1853. vii-x. Print.
- . *Bleak House*. Ed. Nicola Bradbury. London: Penguin, 2003. Print.
- . *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne. London: Penguin, 2002. Print.
- . *David Copperfield*. Ed. Jeremy Tambling. London: Penguin, 2004. Print.
- . *Dombey and Son*. Ed. Andrew Sanders. London: Penguin, 2002. Print.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon, 1965-2002. Print.
- Davidoff, Leonore and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*. Rev. ed. London: Routledge, 2002. Print.
- Hartley, Jenny. *Charles Dickens and the House of Fallen Women*. London: Methuen, 2008. Print.
- Janes, Pamela. *Shepherd's Bush. . . . The Dickens Connection*. London: Malden, 1992. Print.
- Maconochie, Alexander. *The Mark System of Prison Discipline*. London: Mitchell, 1857. Print.
- Osborne, Charles Churchill. U.d. TS Osborne Papers 46405A. British Lib., London.
- . U. d. TS Osborne Papers 46406B. British Lib., London.
- Paxman, Jeremy. *The Victorians*. London: BBC, 2010. Print.
- Salotto, Eleanor. "Detecting Esther Summerson's Secrets: Dickens's Bleak House of Representation." *Victorian Literature and Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Schor, Hilary M. "Part III. The Daughter's Portion: 4 Bleak House and the Dead Mother's Property." *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. Print.
- Taylor, Harriet. "Enfranchisement of Women." *The Disenfranchised: the Fight for the Suffrage*. Ed. Marie Mulvey Roberts and Tamae Mizuta. London: Routledge, 1993. Print.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin, 1972. Print.